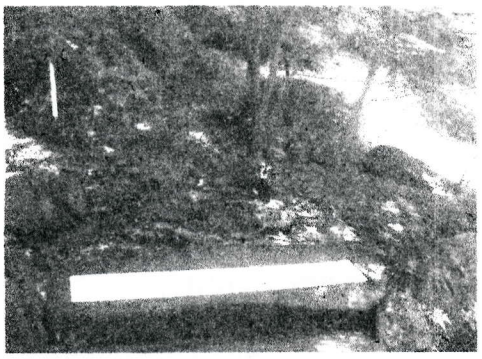
幻住庵保勝会だより

令和３年７月吉日　　保勝会員　３４８名（Ｒ３年度）

平成の幻住庵模型

今年も第８７回幻住庵芭蕉祭は規模縮小で実施



青紅葉に映える陶板の「幻住庵記」

令和３年度に入っても依然として新型コロナウイルス感染症が治まらない中、去る５月１６日（日）幻住庵保勝会・新役員会を開催し、令和２年度の事業報告、会計報告（監査報告含む）と令和３年度の事業計画、予算計画、新役員の紹介・承認等を協議検討しました。その中で、今年度の事業計画の中の総会と第８７回の芭蕉祭の持ち方について議論いただきました。その結果、事務局提案通り、総会は役員理事による書面決議で行うこと、芭蕉祭は昨年同様、規模を縮小した形で事務局員のみにより実施することに決定しました。なお、　役員理事（２０名）さんによる書面決議の結果は次の通りです。

議　　案	承認	不承認
令和２年度事業報告	２０	０
令和２年度会計決算及び会計監査報告	２０	０
令和２年度幻住庵管理・運営決算報告	２０	０
令和３年度役員選出及び紹介（案）	１９	１
令和３年度事業計画（案）及び予算（案）	１９	１
第87回芭蕉祭開催について	１９	１

今年度も従前のように盛大な芭蕉祭は残念ながら実施出来ませんが、次年度こそは正常な形で再開できることを願いつつ、このコロナ禍を乗り越えるしかありません。国分の宝物であるこの貴重な文化財を護持して行くため、保勝会員を始め地域の皆さんには今後とも変わらぬご支援・協力を宜しくお願い致します。

最後になりますしたが、各町の自治会長様はじめ組長様には会費徴収等で大へんお世話になり誠に有難うございました。　　（文責　陌間　實）

令和３年度の幻住庵保勝会役員一覧

役職	氏　名	住　所	役職	氏　名	住　所
会　長 俳句事務局	陌間（はざま）　實	一丁目２８－６４	副会長	中　村　　芳　昭	二丁目１３－１８
副会長 会計	今　村　　平和（としかず）	一丁目３６－７	副会長	藤　林　　雅	二丁目３６２－１１
事務局長	良　峰　　三　男	一丁目47－12	事務局次長	丸　山　　和　夫	一丁目３１－１３
理事	渡　邉　　茂	一丁目１区自治会長	理事	大　宮　　正　義	一丁目２区自治会長
理事	古　平　　明　久	一丁目３区自治会長	理事	高　橋　　和　雄	一丁目４区自治会長
理事	北　澤　　紘	一丁目５区自治会長	理事	西　出　　浩　彦	一丁目ソシエテ自治会長
理事	加　瀬　　友　洋	二丁目１区自治会長	理事	立　石　　隆　之	二丁目２区自治会長
理事	山　田　　稔	一丁目９－２４	理事	乾　澤　　正　和	一丁目２９－３８
理事	矢　野　　恵美子	一丁目４－３２	理事	加　藤　　ふみ子	一丁目３３－２８
理事	中　山　　豊　子	一丁目７－３	理事	松　﨑　　敏　和	二丁目１１－３
監事	後日決定	一丁目２区副会長	監事	後日決定	一丁目３区副会長

令和３年度の事業計画

5/１６	新役員会会議『令和２年度事業・決算報告、令和３年度事業・予算、第８７回芭蕉祭』、
6/6	総　　会　【新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止】　役員による書面決議
8/２２	合同役員会　【新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止】
9/1	幻住庵俳句コンクール年間優秀賞審査会（一般の部）
9/１６	幻住庵芭蕉祭俳句審査会（少年の部：晴嵐小６年、北大路中生徒）

１０/２	芭蕉祭前日準備（事務局員のみで実施）
１０/３	第８７回幻住庵芭蕉祭（新型コロナ感染拡大防止のため事務局員による規模縮小した形で）
１０/２３	幻住庵芭蕉祭反省会　【　中止　】
年間通して	幻住庵俳句コンクール【年４回　第１０５回～第１０８回】　入賞者に賞状・額縁郵送 （年４回実施。１回毎に整理･選句･選句集発行･入賞者に送付）

―連載―　　〈近江で詠まれた芭蕉発句の鑑賞〉

病雁の夜寒に落て旅ね哉

海士の屋は小海老にまじるいとど哉

元禄３（1690）年９月下旬、堅田・本福寺での作。「堅田にて」の前書があります。磯田昌房宛ての書状に、「拙者散々風引候間、蜑の苫屋に旅寐を侘びて風流さまざまの事共に御座侯」とあって、前句が出ています。堅田で風邪を引いて侘びしく伏せっている自分と、群れから離れて降りてくる病雁。侘びしい自分の境遇の標微として病雁を描いたのでしょう。

「病雁」は「びようがん」と読む説と「やむかり」と読むのと両説あります。基角の『枯尾花』に「病雁のかた田に落ちて旅ね哉」という形で出ているので、「ヤムカリ」と読む説が有力です。しかし、山本健吉は近江八景に「堅田の落雁」とあることから、「びようがん」と音読すべきだと述べています。

字句は、湖岸を逍遥した芭蕉が、ふと一軒の漁家で、笊か筵にぶちかけられた小海老のあたりを、まぎらわしくいとど（えびこおろぎ）が跳んでいるのを見た、という嘱目の句です。軽い即興句ながら、ものさびしい秋の風趣を感じさせます。

この両句を巡って、『去来抄』はまたこれも有名なエピソードを伝えています。「猿蓑」編集の時、芭蕉この両句のどちらを入れるべきかを問うたようです。それに答えて、凡兆は「小海老にまじるいとどとは、句のかけり、事あたらしさ、誠に秀逸なり」と言ったようです。それに対して去来は「病雁は、格高く趣かすかにしていかでか爰を案じつけん」病雁を採用するように主張しました。結局、両句とも入集しました。後に芭蕉は「病雁を小海老などと同じごとくに論じけり」と笑ったといいます。芭蕉は「病雁」の句が優れていると思いながら、「海士の屋」の句も捨て難いと思ったのではないでしょうか。

復本一郎は『芭蕉の言葉「去来抄〈先師評〉を詠む」』（講談社学術文庫）のなかで、両句を「主観句」と「客観句」と指摘、両句はまったく異質の句であり、同一基準で優劣はつけられない、としています。

（保勝会理事　山田　稔）